

日本語における丁寧形「です・ます」の機能

鏡 耀子

東北大学大学院文学研究科博士課程

本発表では、現代日本語における敬語の一形態であり、文末に用いることで丁寧さを表す形式とされる「です・ます」に焦点を当てる。用例をみると、丁寧さという概念では説明できない場合も存在するため、「です・ます」がどのような機能を持っているかを改めて検証することを本発表の目的とする。ここでは3つのケーススタディを取り上げる。

まず、1960年前後の資料をみると、「です・ます」の用法がこの前後で変化したことが指摘できる。以前は上下関係によって使用の有無が厳しく決まっていたが、近年では上下関係のみならず話し手や書き手が表現したい印象によって決まるといえる。

また、「です・ます」の使用の有無は、丁寧か否かにかかわらず、意味的に決まる場合もある。「です」に対応する普通形として「だ」が挙げられるが、これらは常に交替可能というわけではない。それは、「です」には「相手に直接伝達する」という機能があり、「だ」にはそれがないためだと考えられる。

さらに、「です・ます」の意図的な用法の例として、「です・ます」を伴わない普通形が基調となっている文章への混用という現象がある。この場合、「相手に直接伝達する」というコミュニケーション上の機能によって読み手の注意を引き、文章の本質的なポイントを強調するために使われると考えられる。

このように、現代日本語における「です・ます」は、丁寧さを表すだけでなく、相手への直接の伝達を示すというコミュニケーション上の機能を果たしている。